

松前巡礼の旅

老いの坂道を下りながら考えた。「隠れキリシタン受難」の跡地巡礼の旅をしよう。この旅はかねてからの念願でもあった。実は私と隠れキリシタンとの接点とはごく近くにあった。私が住んでいる茨木市(大阪府)の山奥(忍頂寺、音羽部落)の古農家から大正時代に国宝にも指定されているザビエル画像や戦国時代のキリシタンが持っていた十字架やメダルなどが数多く発見されたのである。今は市のキリシタン資料館にそれらが展示されているが、資料館が出来る前は各家が所持していて一般に開示されることはなかった。私はかれこれ何十年か昔最初にそれらが発見されたお宅(東家)を訪ねて見せてもらって話を聞いたことがある。考えてみれば戦国時代、隣りの高槻城主が高山右近、茨木城主の中川清秀もキリシタン大名であり、領民のかなりがキリシタンであったと言われていたからキリシタンの遺物が眠っていても不思議ではない。しかし江戸時代の厳しい禁教下にあってもよくぞ廃棄されず見つからず今日まで遺っていたのはまさに奇跡に等しいとされる。これらの遺物は先祖から開けるなと固く言われて屋根裏に密かに隠されていたものである。

ところで3年前茨木市と大分の竹田市が姉妹都市になった。理由は秀吉時代茨木城主であった中川家が今の大阪府竹田市に転封、キリシタン大名・中川家が取り持つ縁である。以来両市の間でキリシタンの歴史に関する講演会や相互交流会が開催されている。そんなこともあってザビエルの足跡やキリシタンたちの受難の史跡巡礼の旅こそ人生終焉のイベントにふさわしいと思い立った理由である。しかし体調不良でしばらくは旅どころではなかったが、じっとしては老化は進むばかり、体が動く間にと旅に出ることにした。萩や津和野を手始めに長崎、大村、平戸、島原、天草、竹田そして今年五島へと足を伸ばしてきた。歴史としての知識だけなら歴史書をよめば事足りる。しかし巡礼は実際に歩いて、見て、聞いて体感できる何物にも代えがたいもので、何か目的をもって歩くことは単なる物見遊山とは違う。かつてキリシタンたちが歩んだであろう地に立って彼らの歴史を回顧すれば彼らが苦難に耐えて歩んだ道が昔キリストや使徒たちが歩んだ苦難の道とダブって心に響く。プロテスタントの中にはキリシタンは宗旨が異なるからと彼らの受難とまともに向き合おうとしない人も多いかもしれないが、私はそうは思わない。仮にザビエルが日本に来なくても、いずれキリスト教は入ってきたであろう。しかし明治政府が旗印にした神統日本が外圧によって信教の自由を認めざるを得なくなったのは他ならぬ彼らキリシタンの受難であるといって過言ではない。日本のキリスト教徒が今日あるのも彼らが迫害に耐え生命に代えて伝え護りつづけた神の真理こそキリストの愛、恩寵に他ならないと私は確信する。

さて、この度私が松前への旅を思い立ったのは他でもなくかつての蝦夷の地にもキリシタンが居て多くの殉教者を出したという事実を知ったからである。実は最近まで北海道はキリシタンと無縁の地とばかり思っていたのである。東北には伊達正宗の治世下に沢山のキリシタンや宣教師がいたことはよく知られている。し

かし徳川の禁教政策が厳しくなり東北の地でも多くのクリシタンが拷問を受け殉教しているが、その時難を逃れて蝦夷地に渡ったクリシタンも多くいたのである。

少し話はそれるが東北の隠れクリシタンを密かに支援していた後藤寿庵という武士が居たことを紹介しておきたい。後年「東北クリシタンの父」と敬われた彼は今の岩手県一関市藤沢町の藤沢城主・岩淵秀信の三男として生まれた(1578 頃)。まだ若かったころ本家が没落し長崎県五島に渡ったことが知られている。そこで外国宣教師と知り合い、洗礼を受け五島ジョアン(ヨハネ)と名乗る。五島で宣教師から多くの西洋文化を学んだと言われている。製鉄技術に鉄砲や火薬の作り方、治水技術まで習得していたという。伊達正宗の家臣で遣欧使節としてローマに渡った支倉常長を良く知る長崎の商人と知り合い、その人の紹介で正宗に仕えることになった。彼の高い西洋知識を認めた正宗は彼を 1200 石で厚遇した。正宗の使節派遣にあたって常長にいろいろ助言したとも言う。彼は L.ソテロらとキリスト教布教にも努め、東北におけるクリシタンの中心的人物として活躍した。徳川の時代になりクリシタンへの弾圧が厳しくなりだすと伊達藩も彼らクリシタンをかばいきれなくなり、多くのクリシタンとともに寿庵も追放され南部藩に亡命した。そこで山奥などに隠れたクリシタンたちを物心両面に亘り援助したとされる。寿庵は製鉄技術にも精通していたため、クリシタンたちを鉱夫として隠れ住むよう指導した可能性もある。このあたりの奥羽山地は藤原氏の財政を支えたことでも知られるように金や鉄など鉱物資源を多く産し、いろんな流れ者が山奥の鉱山で働いていた。役人の目も届きにくく、隠れクリシタンも多くいたと言われている。そのころ松前近辺でも砂金が採れることが分かり、幕府が蝦夷地の金山で働く鉱夫を募集した際、東北の鉱夫や山師が大勢移住し、その中になんかのクリシタンが居たと言う。このことは蝦夷地(松前)のクリシタンたちのルーツは実は東北の隠れクリシタンたちであることを示すものである。金の採掘だけが目的の幕府も鉱夫の身分までいちいちうるさく詮索しなかったようである。その証拠に松前にやってきた外国人宣教師でさえ鉱夫に化けて紛れ込んでいる。その上当時の松前藩は「蝦夷は日本に非ず」としてクリシタンの活動も自由放任していたらしい。

松前について　そこで私は蝦夷地の隠れクリシタンのことが知りたくなり、7 月 19 日東海道・東北新幹線と海峡線を乗り継ぎ松前に向かった。ここで松前の歴史を簡単に紹介しておこう。昔から蝦夷地と呼ばれてきた北海道にいつごろから和人が住みついたかははっきりしないが、上の国(江差)から松前、函館に至る松前半島の海沿いに和人の定住がはじまったのは、鎌倉軍の藤原氏攻略で敗走した藤原の残党が津軽海峡を渡って住み着いて以来とされる。それに関連して義経・弁慶の蝦夷落ち伝説が生まれたらしい。また鎌倉時代蝦夷地は流刑地とされ多くの罪人が流された。そのような和人の監視のため鎌倉幕府が安藤氏を松前に派遣した。一方和人と先住民のアイヌが衝突する事件も多く、1456 年ごろ上の国にいた武田信広なるものが松前半島を支配していたアイヌを攻略、若くして武勲を立てた。そして花沢館主・蠣崎氏の息女と結婚し蠣崎姓を名乗る。武田信広なる人物の出自や蝦夷に来た由緒ははっきりしないが一応武田一族の出と言われている。彼が松前氏の祖・松前一世とされる。私も松前藩主一族の墓をみたが家紋は甲斐

武田の武田菱と似ている。1494 年信広が死去。その子光広(二世)が継ぐ。安藤氏が支配していた松前の大館はいわば蝦夷地の中心地であったが、1512 年アイヌが蜂起し大館が破られる。そこで光広は息子義広と上の国から船で松前に来て大館を奪還、徳山館と改名し安藤氏に代って松前の支配者となった。四世孝広はアイヌの族長を代表者と定めて交易は松前藩を通じて行うこととしアイヌと商人との直接取引を禁止した。かつ交易収益金を平等に分け与え、アイヌを和人と対等に遇する政策にしたため、以来アイヌも蜂起するようなことはなくなった。五世慶広は 1593 年、名護屋城で秀吉に謁見、秀吉から蝦夷地支配権を認める朱印状を得て戦国武将として秀吉の支配下に入る。同時に蠣崎姓から松前に改姓した。秀吉の死後家康からも大名格(松前藩)として引き続き蝦夷地の支配を一任される。ところが米の採れない松前藩は無石大名のままであったが、幕府もそれでは何だからと仕方なく 9800 石?ということにして大名に次ぐ張出し格にランクすることにした。後に大名として最低の 1 万石が与えられ、晴れて大名籍が公認された。しかし実際はアイヌとの交易(ニシン、鮭、蟹、コンブ、毛皮、鶴、織物(蝦夷錦)など)のほかに砂金や北前船からの徴税などで石高に換算して 10 万石はあったというから人口あたりにすると大大名格である。当時北前船を支配していたのは主に近江商人であった。松前からアイヌとの交易品を積んだ船は酒田や村上、能登、三国などの港を経由しながら敦賀で荷揚げし北琵琶湖から再び舟で大津から淀川を下り京、大坂、堺へ運んだ。帰りは米、味噌、醤油、酒に木綿や雑貨などを積んでアイヌと物々交換した。なお後になって北前船は琵琶湖経由でなく下関から瀬戸内海を経て大坂に入った(積みかえの手間を省くため)。アイヌとの交易の窓口が松前藩一本になる前は物々交換は家来や有力商人に任されていて松前家は彼らから徴税していた(松前では武士は藩から米を給金としてもらわず各々が商人やアイヌと直接取引していた)。したがって交換レートがまちまちで、かつ和人が有利になるようレートの不平等が相次いだためアイヌの怒りが爆発しアイヌ一揆が多発したと言われている(参照:松前町歴史資料およびネット情報など)。 蝦夷地支配を任されていた松前藩は幕府に黙って蝦夷の調査を何回か実施し樺太やエトロフあたりまで踏査している。慶広の時代蝦夷で砂金がとれるらしいという噂が幕府に伝わり、家康が彼に砂金の調査をするように命じたが、彼は蝦夷は「日本に非ず」として無視した。秀吉から恩顧を得ていた彼は関ヶ原でも西方に見方している。松前藩主たちは江戸よりも京や堺に度々行っている。参勤交代で江戸に行くには片道 5 ヶ月かかるのに日本海を船で港をゆっくり巡って行っても 1 ヶ月もかからない。お蔭で京の公家や文人たちとも広く交流し、正室も公家の息女が多い。

松前へ GO! 7 月 19 日盛岡で前泊し、翌朝一番の新幹線で新青森へ。そこから白鳥に乗り換える。来年 4 月には在来線の特急白鳥は廃止される。竜飛崎の手前から海底に潜り、北海道は福島町に出る。海底にあった二つの海底駅はホーム取り壊しで廃止になった。松前には木古内で下車してバスに乗り換える。接続が悪く 1 時間ほど間があるので町をぶらつく。来年の新幹線開通に向けて駅はもちろん町も新しく大改造中である。バスは海岸に沿って国道 228 号線を走るが乗客は少なくほとんど私一人、運転手からいろいろ話を聞く。大赤字だが JR(松前線)

が廃線になったので仕方ないという。90分乗って松前に13:45ごろ到着。すぐ予約していた宿に行く。女将に松前のキリシタンについて調べに来たと言うと、女将曰くには「実は昔この旅館の顧問?をしていただいていた郷土史家の永田富智先生が『えぞキリシタン』という本を書かれ、多分図書館にあるはず」と図書館に電話してくれた。あいにく本日休館だが特別に開けてあげるとのこと。さらに城にある資料館の館長が詳しいから訪ねてみたらとすぐ資料館にも電話してくれた。ところが本日は祭日なので館長は休暇を採って不在とのこと。そこで女将は直接館長の携帯に電話、すると館長は近くの川に砂金を採りに来ているという。私も受話器に出て松前に来た理由を告げると、大阪から遠路きてくれてありがとう、そういうことならすぐ資料館に戻るから図書館が終わったら寄ってくれとのこと。そこで女将に礼を言い教えてもらった図書館へ。図書館につくとすでに永田氏の本のほかにも関連ありそうな本を出して待っていてくれた。1時間ほど目を通し、必要な個所をメモしたりコピーしてらって、松前城資料館に向った。

蝦夷のキリシタン 蝦夷地のキリシタンや彼らの殉教について手短にまとめると、秀吉の禁教令以後近畿地方などから多くのキリシタンたちが逃げるようにして九州や東北に散って行った。秀吉時代は東北はまだ取り締まりは厳しくなく、特に流れ者が多かった山奥の鉱山などに身を隠して山仕事についたキリシタンも多かった。家康の時代になって松前の周辺で砂金が採れるとの噂が広がり、家康が松前藩に調査を命じたが動かなかったため、幕府の金山奉行・大久保長安を派遣し金山を発見、金の採掘に乗り出した。そこで鉱夫募集の噂を聞いた東北の山師たちが大挙して蝦夷(松前)に渡り、ゴールドラッシュの観を呈したという。その中に潜んでいたキリシタンたちが次第に団結し、粗末な礼拝小屋を作り十字架とマリヤ像を置いて礼拝するようになった。その噂を聞いて二人の外国人宣教師がやってきて彼らと起居を共にするようになった(1618~1622)。一人はイタリア・シシリー島出身のアンジェリス神父、もう一人はポルトガル人神父のカワニユ。彼らは鉱夫と商人に変装して関所を通過したと言われているが、変装していても西洋人と和人の区別はつくだろうから大目にみられたのであろう。松前藩はキリシタンには寛大で、蝦夷は日本でないから日本の法に触れずという態度をとっていたようである。しかしこの二人の宣教師は国内に戻ったあと逮捕され、アンジェリスは1623年江戸で火刑に、翌年カワニユが仙台で殉教した。彼らは松前のキリシタンの支援以外にアイヌへの布教の可能性と樺太―アムール経由支那への北方ルートの探索も目的の一つだったとも言われている(ネット情報:『エゾキリシタン』の秘められた悲劇)。余談だが何年か前に私が北満州を旅した時、中・ロ国境のアムール河に面した黒河という街を訪れ、アムール河をクルーズしたことがある。その時知ったのは満州の産物を船でアムールを下り間宮海峡から小樽や新潟へ運ぶのが一番経済的と聞いた。当時の宣教師がそのような北方ルートの調査を(目的は何であれ)本当に考えていたとすれば西洋人恐るべしだが、実際に中国の絹織物(蝦夷錦もその一つ)や陶器などをアイヌがこのルートから入手しており(このルートは北のシルクロードと呼ばれる)、松前藩はアイヌを通じて得たこれらの舶来品を京に運び天皇や公家、さらに秀吉らにプレゼントして喜ばせていたようである。

蝦夷キリシタンの悲劇

彼らの上に悲劇がやってきだのは家光の時代に起こった島原の乱(1637)がきっかけである。乱の起こりは島原藩主松倉氏の苛政に苦しんだ領民の一揆であるが、元々領民にキリシタンが多かったので幕府は一揆はキリシタンによる幕政への反抗とみなし、全国の大名に命じてキリシタンの殲滅を図ったものである。(この報告を宣教師から受け取ったローマ教皇は武器を持って体制への反抗に及んだのはキリスト教徒にあるまじき行為として島原事件は殉教とは認めていない)。当然松前藩に対しても藩主を直接江戸に呼び出し、藩内のキリシタン全員の処刑を命じた。(永田氏の本によれば)藩主は戻って家老たちと相談、まずキリシタンの調査から始めたが金山のみならず城下にも家来にもキリシタンが多く、全員を逮捕し処刑すれば藩内が動揺し藩体制が成り行かなくなるおそれあり、かつアイヌとの交易や北前船も寄り付かなくなり藩の財政に支障をきたすとの意見が出て、それならば山奥の金山にいるキリシタンだけを密かに処刑するがよろしかろうと意見一致。そこでまず大沢金山に兵士を派遣、男女 50 名のキリシタンを逮捕、処刑。続いて千軒岳金山でキリシタンと名乗り出た 50 名を斬首、他に逃亡した 6 名を江差の石崎で見つけて処刑、計 106 名が殉教した。

ここで私の疑問はキリシタンたちが千軒岳金山になぜ留まりつづけたのか？ 彼らは禁教令を逃れてここまで来た筈。蝦夷は広い土地だから幕府の手の届かないもっと遠方にも逃げられたのではないかと。そうしなかったのは松前藩にはキリシタンを監視する気がなかったからであろうか。金山に集会所を作って皆で礼拝していたとの記録があるらしいから本土と違ってここは安全と信じていたとしか思えない。106 人とはそう多くないと思うかもしれないが、当時の蝦夷の和人は 1 万名ほどらしいから 1%の和人が処刑されたことになる。処刑地と伝えられている千軒岳中腹に 1961 年函館のカトリック教会が十字架を建て、毎年 7 月末そこでミサがおこなわれている。(なお永田氏は千軒岳を何回も調査したが処刑地らしき所は発見できなかったとその著書に書いている)。私はその十字架を見に行きたいと館長に行き方を聞いてみたら、とてもあんたが一人で行ける所じゃない、それに今年は熊の出没が多いという。実はここへ来る前に千軒岳山麓の秘湯・知内温泉(温泉の上流に砂金鉱山があった)に泊まるべく予約の電話をいれたが満員で泊まれなかったのだが、十字架の場所がそんなに山深く険しい所とはその時は知らなかった。なお、千軒岳の名の由来は鉱夫小屋が沢山あったからの由。

隠れキリシタンの遺物

館長が特別にあんたに見せたいものがあると言って奥からダンボール箱を持ってきた。中から鳥居の付いた厨子とそこに祭られていた神像(写真右:聖徳太子像ではないかとの説もある)が出てきた。神像の背中にマリヤの顔が彫刻されている(中)。確かにキリシタンが密かに拝んでいたものであろうが、観音像でなく神像とは珍しい。もう一つ金属製のキリストの十字架像とメダルが入っていた(左)。手に取ってみたが十字架にはイエズス会の紋章がある。多分日本製ではなく、蝦夷を訪れた宣教師の持ち物だっ



たかも。とにかくこれらは松前の古道具屋が持ち込んだもので由緒がはっきりしない。一応専門家の鑑定で贋作でないとのことだが、出所不明のため一般には公開展示していないとのこと、もったいない話である。今は分析技術が発達しているからメダルや十字架の金属成分も非接触でわかり、どこで鑄造されたかもわかるはずで、ぜひ実施されることを望む。公開しないという約束で写真を撮らせてもらった。この写真を茨木市の学芸員に見せたが初めて見ると言っていた。

永田氏は本の中で「松前家の墓を見ていたら織部燈籠を見つけた(右)。また椿姫(第六世藩主正室)の墓扉に(左) 十の上下に一を引いた<王>のような彫刻を見つけ、これらはキリシタンをカモフラージュしたのでは」と書いている。私は館長の案内で松前城の後方にある松前家の墓を見に行った。確かに古田織部(利休の弟子)がデザインした織部燈籠が一つある。織部燈籠はその形や合掌する観音?の彫像からキリシタンをカモフラージュするのに利用されたいという。私が見たのは津和野と中津(大分)にあり(左下:黒田藩士?の子孫の庭で撮影)、しかし松前藩主の家系にキリシタンがいたという証拠はないと館長は言う。なお、織部が茶人だったことから織部燈籠は茶庭によくある。ちなみに我が家にもある(右下:我が家の織部燈籠)。



翌朝、バスで函館に出てハリストス正教会にて山下リンのイコン画を見る。雨になり隣のカトリック教会で雨宿りしていたら親切にもビニール傘をいただき、それをさして雨が流れる坂を下る。函館駅から特急北斗に乗って長万部まで。予約しておいた二股ラジウム温泉の車が迎えに来てくれていた。この温泉は長万部から20kmほどの山深い秘湯の温泉である。道外からも湯治にくる知人ぞ知る名湯である。いろんな病に高い効能をもつ温泉で、今では韓国や中国からも来ると言う。その日の宿にも大阪から10日間も湯治で来ているという老人が二人もいた。放射能と鉄を含む石灰石層から湧出する湯は確かに上質である。私も折角来たのだからしばらく滞在したいところだが一泊だけで、翌朝、日本海に面する寿都にでて西海岸に沿って走るバスで岩内に行った。ここはニセコの西側の入り口でもある。更にカムイ岬を経て小樽へ。岬は暴風雨のようで折角の絶景も何も見えない。乗客は私と韓国から来たという若い女性の二人連れのみ。彼女らもがっかりしていた。23:30 発の新日本海フェリーに乗船する前、久しぶりに小樽の寿司屋に入る。続いてタイから来たと言う美女二人、私の隣に座って手慣れた調子で握りを注文している。それも達者な日本語で。てっきり小樽で働いているのかと思って聞けば北海道を旅行中という。日本が好きで日本語を勉強しこれまで4回日本に旅行で来ているとのこと。寿司屋の親父も今は外国観光客が来なければ日本人だけでは商売にならないと言う。とにかくゆっくり寝て体調を回復させたかったので個室ベッドを選択。波は穏やかでほとんど揺れない。陸地から200km 沖を航行する上に雨で島影一つ見えず。期待していた日本海に沈む夕日も拝めずままた翌日の19:26 予定通り東舞鶴港着、バスで三宮へ、帰宅は深夜の1時半でした。